阿部彩『子供の貧困－日本の不公平を考える』岩波新書 2008年

第1章 貧困世帯に育つということ

問題提起

第2節「貧困の連鎖」の中で、「子ども期の貧困の経験と子供が成長してからのさまざまな状況がどのように関連しているかを調べており、2つの間に明らかな相関関係があることが報告されている」(P18, L12)とある。

それでは、なぜこの相関関係が生まれるのか。具体的にどのような要因が影響して大人になってからも不利という状況を生んでいるのか。

Dグループ：

親の貧困によって子供の教育の機会が限られてしまう。それにより子供の学力にも影響が出てしまい、大人になっても学歴や職種、所得に格差が生まれるから。

Cグループ：

親の所得が低いことによって、子供が十分な教育を受けることができず、低賃金の職業にしかつくことができず、結果として貧困のサイクルから抜け出せなくなるから。

Bグループ：

子ども期の貧困の経験、子供が成長してからの様々な状況の間にある要因として親の低所得があげられる (p24)。低所得により教育機会が限られ良い高校、大学への進学率が下がってしまう。

Aグループ：

低い生活水準という状況が子ども期の限られた教育機会、不十分な医療、心の貧しさなどを生み、そのことが大人になってから低所得や、不健康な肉体、子供への虐待などの状況を引き起こしていく。